

數千内附す、齋明卷に元年秋七月難波朝に於て北蝦夷九十九人東蝦夷九十五人を饗し、柵養蝦夷九人津刈蝦夷六人に冠各二階を授くとあり。此に北蝦夷とは越國に在るもの、東蝦夷とは陸奥にある者を云ふ、越國にも陸奥の如くに北邊には蝦夷渡り來て多く居住せしなり、越の北の邊とは出羽の國の地なり、出羽はもと越後の國にて越の域なり、續紀に和銅元年九月、越後國より新に出羽郡を建てんことを言す、同五年九月始めて出羽國を置くとあり、されば越の蝦夷と云ふは出羽の地に在りし者をいふなり。

出羽國は陸奥の國の内を分けて建てたる國なりと云ふは僻事なり、其は續紀に和銅五年十月陸奥國最上置賜二郡を割きて出羽國に隸くとあるを心得違たるものなり、之れは越後國を分けて出羽の國を建てられたるうへにて、陸奥國の二郡を出羽に屬せしめたる誤なり。四年阿倍臣、船帥一百八十艘を率ゐる蝦夷を伐つ云々、五年にも阿部臣を遣はし船帥一百八十艘を率ゐて蝦夷征伐の事を載せたり、將軍の名は記されざれども五年の條に、或本に云ふ、阿部引田臣比羅夫、肅愼と戰ひて歸り虜四十九人を献すとあれば、比羅夫なる事疑なきが如し、されど四年と五年との二度に出征したるにあらず、何れか一度の事を異なる傳へによりて紛れて二度に記されたるならん。阿倍臣の征伐には渡島の蝦夷等を召集めて大に饗したりとあり、五年の條に蝦夷國を討つとあれ

ば正しく其の本國のことなり、他はみなただ蝦夷とのみありて、國といへることはなきを此にのみ國といへるは其の本國なればなり、文中の膽振鉏、肉入籠、後方羊蹄などみな蝦夷國の地名なり云々。是にて比羅夫の渡道は故實明かなるべし。

五年、坂合部連石布、津守連吉祥、唐國に使ひす仍て陸奥蝦夷男女二人を以つて唐主に示す云々唐主問て曰く、此等蝦夷國何方に在るか、使人答て國は東北に在りと、問ふ蝦夷幾種か、答、類三種あり、遠き者は都加留、次ぎは龜蝦夷、近き者は熟蝦夷に名づく、今は是れ熟蝦夷なり、每歲本國の朝に入貢すと、問ふ其の國五穀有りや、答之れなし、肉を食して存へ活く、問ふ國に屋舎ありや、答之れなし深山の中、樹木に止住む云々とあり。五穀なしなどいへるは蝦夷の本國の事なり、然るに遠き者を都加留と名づく云々は、陸奥出羽に居る者どもを云へりと聞ゆ、されば龜蝦夷熟蝦夷と云ふも、陸奥出羽にて、其の居住の遠き近きの別あるに過ぎざるべし。天武卷に十一年陸奥國蝦夷二十二人に爵位を賜ひ、同年越蝦夷伊高岐那等俘人七十戸にて一郡を爲らんことを請ふ、即ち之を聽すなどあり、當時陸奥出羽に蝦夷の雜居したること、意外に多かりしなるべし。

## 安倍頼時の事

一夜話といふ書に「昔安部貞任、宗任が父頼時、奥地より北に國あるを知り、其の所を我が物にせんと子共郎黨引具して艦ひして此の地に押し渡り、大河を三十日程漕ぎ上り見れど、すべて無人の地なりしに、俄に兩山鳴動し、胡人千騎斗り出で来て、彼の大河の底もしらぬ淵を馬にて苦もなく渡りし様を見て膽を冷して歸りしといふは。宇治拾遺に出で定かに蝦夷の國とはあらねど此は必ず西蝦夷地ならぬかと思はるゝなり」蝦夷人の馬に乗る事なければ此騎馬人を胡人なりとは昔より言へり」東方はエドロフ邊まで深く入るとも、胡騎に逢ふべきよしなければ、此の大河は西方のイシカリなどにやあらんか。拾遺の頃までは蝦夷邊はまだひらけで、今のやうにはなし又想ふに此の物語も、宗任法師に直ちにきかれしとも思はれぬ物から、最初に海路出船の所もいとおぼろなるべし、されどイシカリより先きも猶蝦夷地なれば、胡騎はいかがして來たりけん、唐太の地方は山丹滿洲へつづけば、其の邊ならんかといふ人あり。

山丹にても蝦夷にても、尊者の事をシヤムといふ、此のシヤムの同語なるによりて地續きならんと思へど、尙ほ海をへだて、唐太の西北邊ナソコといふ所の出崎より、山丹へ海上十里ばかり

離るゝといふ、夢にだに見ぬ北溟萬里の國の事なれば實は知りがたし、ソツヤより唐太へ海上舟路十七八里、直徑六七里隔て、此の大河の事は、右にも左にも覺束なし。但日本人の津輕南部の海を越えて蝦夷地へ入りしは、此の頼時や初めならん、此の以前に將門叛して新皇と稱して、弟の將平に正月一日を以て、勃海國を討取り、東丹國を攻めて領掌すべしといひしは、大膽ものなり勃海東丹、みな蝦夷の北なり。

むかしアツケシの酋長イトコイといふ者、遙に東北の島へ渡り夥しく漁獵し、其の魚を乾して持ち歸りしより其の島をカンシヤケ島と唱へしといひ傳ふ、夷語に干をシヤツケともサツケとも云ふ由鮭はシへなれども干すもの故に、シヤケといふか、今はカムサツカ、カンカツカ、カムシヤツタエ、カムサスコイなど、轉じたる由或人いへれど、其の本は審ならず。

山丹は高麗夷丹の地にして、遼の本國契丹の種類なるが山により深く住めれば山丹といふ、山越山戎、また生女直熟女直の類、例ありて同じ種類をも分けて名づけしなりとかや、山に住むから山丹といふは少し唐人らしきいひ様なり、又山丹邊の人を蝦夷人キタイチンといふ、これ漢人ならんといふ人あれど、やはり契丹人なるべし、又東北にゴロタラハンといふ所あり、之れは大韃靼なるべし、矢張ヲゴロ人もおなじ、モンゴルは蒙古國なるべくヲボツコイは勃海なるべく思

はると或人いへり云々

### 胡沙笛の故事

胡沙笛の古るき書に見えたるは

こささかば曇りもやせん陸奥の

蝦夷にな見せそ秋の夜の月

此の歌は始めにて爲家卿の詠まれたりと言ひ傳ふるも定かならず、又胡沙笛は何處より傳はりたるものか諸説區々にして信憑する所なし、されど今東遊記に記されたる事を紹介せんに。此の歌は爲家卿のよめるなりと言ひ傳ふ、すべて蝦夷人は種種の奇術ありといふ、其の中に口より霧のごときものを吹き出し、或は敵に逢ひ又は猛獸に出會ひたる時、此の霧を吐き我が身を隠し其の難を通る、事あり、是をコサ吹といふなり、又或説には蝦夷人木の皮を巻きて笛を造りて之れを吹く之をコサ吹と云ふ、コサは即ち胡笳なり、笛聲に山氣動き登りて月も曇るといふ、不思議なる事と思ひしが、今度北地に遊びて、其の趣きを合點せり。

凡そ北國は惣體風吹かざる日は稀なり、殊に出羽の邊に至りては、北風猶更烈しく、海邊砂塵常

に起り虚空も濛々として青天白日を見る事少し、又外ヶ濱邊は極陰の地なる故にや、海氣常に空に濛々として霧の籠るが如し、松前邊の海中も、平常海霧甚だ多くして、船の往來するにも、毎度難儀に及ぶ事あり、之をモヤといふ。總じて羽州より津輕の邊は、空の氣色上方とは違ひたるやうに覺ゆ、至極の晴天といへども、空の色青みすくなく、白み勝ちにてどんみりとし、日色迄も薄し、青天白日といふ氣色にあらず、余秋田に居たりし時、浪華の中田公超、此の二三年此の秋田に來り住す、舊相識なりしかば暫し同居せり。或日庭先に奴僕の古き襦袢の洗濯して竹竿にかけてたるありしが、中田之を指して、此の色の空の色に似たるを見給へ、我れ此の地に來り二三年に及べるに、秋天晴朗の時といへども、遂に碧瑠璃の如き色を見ず、至極の晴たる日此如く白みたる計なり、天色の上に異なるをそこには心付かずやと言ひし、余は只暫しの逗留ゆえ空の晴れたるに逢はざるとのみ思ひ居りしが、是より後心を付けて見るに、實に中田の詞の如し。

此の邊だにかくあれば、況して蝦夷地方は陰風常に烈しく胡塵空に滿つるがゆゑ、胡沙吹かば曇りもやせん、とよみしも宜なり、すべて津輕秋田邊は北に面したる地面故、陰風最も甚だし、南部の地は緯度同じけれども、東向の地なるが故に、日月の色も空の模様も風のけしきも、中國畿内に格別變らざるやう覺ゆ。又秋田津輕の邊の村民の子供、板木の皮の如く見ゆる、木の皮にて

未開にて巻きて吹くものあり、其の聲甚だ大なり、是れ胡笳の遺製なりとぞ、所々にて見及びし故、一つ携へ歸りたくも思ひしかども、長途荷物の重きをいとひやめたり云々。

記者曰く、木の皮にて笛を作るは、今も津輕地方の山間に行はる、木は胡桃木の皮に限るが如し、其の音壯絶村童爲めに唇を腫すもの多し。矢張胡笳の遺製なるべきか考ふべし。

# 北海史談 第壹輯

明治四十三年七月七日一版發行  
大正十一年五月十五日印刷  
大正十一年五月二十日發行

(北海史談第壹輯)

定價金五圓

版權  
所有

著作兼  
發行者

千葉 稻 城

印刷者

早坂 亥 質

印刷所

東北印刷株式會社

仙臺市教樂院丁六番地  
電話八六〇、二八七番

北海道函館區天神町八十三番地

發行所

北海史談發行所

終

復  
写